

研究委員会企画シンポジウム 1

心理学者教育の在り方

企画者	森 敏昭 (広島大学), 吉田寿夫 (兵庫教育大学)
司会者	吉田寿夫
話題提供者	内田伸子 (お茶の水女子大学), 坂元 章 (お茶の水女子大学) 下山晴彦 (東京大学), 村井潤一郎 (文京女子大学)
指定討論者	松田文子 (広島大学), 村上 隆 (名古屋大学)

企画の趣旨

最近の我が国の心理学界においては、“ジャーナルの審査に通りやすい、型にはまった、無難な内容の論文が横行し、人間についての深い理解や実践などに対する意義が強く認められる研究、おもしろい研究、夢のある研究がほとんど見受けられない”という寂しい事態がしばしば指摘されてきた。このような憂うべき現状を鑑みると、これからの教育心理学会の重要な課題の一つは学術水準を引き上げることであり、そのためには我々の教育実践の現場である心理学者教育の在り方について一度問い直しを試みる必要があると考えられる。

また、学者やなんらかの学問をベースにした実践家という者は常に生涯学習を心掛ける必要性が極めて高い職業だと考えられる。したがって、大学院などでの公の教育を受けることを終え、(現在は心理学者教育に直接携わっていない立場で)一端の研究者や実践家として活動している者にとっても、上記のようなことについて省察することは有意義であろう。さらに、上記のような事柄について省察することは、(心理学者教育に限らない)教育一般の問題についての我々のスタンスにも多くの示唆を与えてくれるものと期待される。

女性研究者の養成には準備が必要

内田伸子

1. 準備は学部教育から始まる；研究には職人的な技能の習得が不可欠。方法論(実験法や統計的方法の手続き的知識 Knowing how の習得)と内容(概論や特殊講義による宣言的知識 Knowing that の習得)をつなぐ演習(批判的な討論や異議申し立て方の習得)の3本柱のもとに構成された専門基礎教育を土台にし、各自の興味を凝縮させ、教師と二人三脚で各人の興味を研究テーマにまで収束させ、論文をしあげさせ、学会誌に投稿させる。

2. 時間は有限である；博士号取得の時期の目標にあわせてタイムスケジュール(学術振興会研究員への準備と博論の準備を兼ねて学会誌論文3本+ α の印刷と研究5,6本を原資にして修士課程に入学してから5年目の夏には博論の作成に取りかかる)のもとに各自の生活状況と対応させて活動計画を立てさせる。

3. 深い穴を掘るためには広い面積を耕さねばならない；幅広い心理学の知識の習得と専門知識の習得のために、・自分自身で学ぶ・学内外の研究会で学ぶ・「ランチトーク」でプレゼンテーションと批判的思考力を養う・修士・博士課程の院生合同の研究指導ゼミ・個人指導は随時の5つを通して内容と方法の習得。

4. 研究の進め方；先行知見に問題を発見したら自分なりの問題関心と摺り合わせ予備実験を繰り返させ、データと対話する。論文は問題を考え始めたときから書き始める。研究論文に仕上げるまでに、この過程を繰り返す。この過程は個人内で、院生仲間との自主ゼミで、さらに、教師との二人三脚で凝縮させていく。

5. 難題山積のライフコースへの見通しをもつ；女性の利点を活かし弱点を克服するために、結婚・出産・子育て・老いを看取る・更年期障害など難題山積の現実について自覚し、見通しと準備が不可欠。就職機会の性差別にどう対応するかは私にとっても課題である。

6. よい発達研究者になるための5箇条；・知的好奇心が旺盛であること・野心的であること・執拗であること・楽天的であること・生きとし生けるものへの愛をもつこと。・“真に得たいと思うもののために失うものを惜しむな”(よい研究者・女性研究者を育てるためには教員同士の連携と協力が不可欠である。)

ゼミ内共同研究による心理学者教育

坂元 章

最近のモード論で主張されているように、従来の心理学の在り方は、ディシプリンを基盤にしたものであり、そのため、心理学者教育の場においても(少なくとも日本では)、理論志向の価値観が強調され、少数のテーマや方法論をじっくりと掘り下げる作業が続けられてきたように見える。

しかし、最近では、心理学に対する社会からの要請が強まっており、その時代の人間や社会の問題を解決するために、心理学が貢献することが求められている。それゆえ、心理学者教育においても、そうした仕事ができる人材を養成することがもっと強調されなくてはならない。

社会的貢献ができる心理学研究者には、従来の心理学研究者と比べて、少なくとも次の要素が重要であ

と思われる。第1に、社会問題の解決や実践に対する志向性を持っていること。第2に、さまざまなテーマに取り組み柔軟性を持っていること。第3に、他の研究者と生産的な協働ができること。第4に、多くの方法論に習熟していること。第5に、少ない時間で研究成果を挙げられること。今後の心理学者教育においては、心理学の基本的、発展的な知識や技能の習得に加え、これらの点を高める工夫がより望まれるように思われる。

私の研究室では、1997年から現在まで、インターネットの心理的影響に関する、ゼミ内共同研究プロジェクトを行ってきた。先行研究の輪読と実証研究の実施からなるものであるが、これまでに1冊の書物、10本以上の審査論文を含む多数の論文を出し、4年にわたる雑誌連載を続けている。このプロジェクトはもちろん、研究を目的としたものであるが、教育の目的もあった。とくに上で挙げた要素の向上を目指したものであった。当日は、このプロジェクトの概要を紹介し、教育における成果や問題点などについて述べたい。

心理学の実践専門家（臨床心理士）養成の立場から

下山晴彦

心理学者の教育の在り方を考えるにあたって最も重要なことは、教育の目的は何かを明確にすることである。心理学にはさまざまな専門領域があり、各領域ごとに目的は異なる。そこで、本シンポジウムでは、演者の専門である臨床心理学の立場から臨床心理士の教育の在り方を述べることにする。

臨床心理学は、実践活動を基本とする心理学であるので、実践技能の教育訓練プログラムが重要な位置を占める。しかし、臨床心理士を高度専門職業人として位置づける場合、臨床心理学の専門性に基づく教育プログラムを組むことが必要となる。その場合、臨床心理学の専門性とは何かということが問われることになる。臨床心理学は、当初心理療法などの実践活動（practice）が中心となっていたが、それに加えて研究活動（research）が重要な意味をもつようになり、さらに社会的な活動として認知されるにしたがって専門活動（profession）の側面が充実してきた。専門活動とは、臨床心理学の活動が専門的な役割と機能を備えた社会制度として位置づけられるための活動である。

このような実践活動、研究活動、専門活動の知識と技能を修士課程の2年間のみで習得させることは不可能である。そこで、専門性の発達段階を前提として、学部教育、修士課程2年間の専門教育、修士卒業後教育といった長期にわたる体系的な教育プログラムを構成した。学部では、心理学全般および臨床心理学の基礎を修めることを目的とした。そこでは、心理学全般の知識と実証的態度を習得するとともに、フィールドワークなどの質的研究法の基礎技能および対人関係を構成するなかでデータを収集・分析する臨床的態度の習

得が求められる。修士課程では、倫理や価値、制度などの専門活動の知識学習、アセスメントと介入から成る実践活動の技能実習、臨床心理学研究の方法演習がテーマとなる。さらに卒業後教育では、現場に出た臨床心理士は担当職域での専門技能の向上をはかる。博士課程に進学した者は臨床心理学研究と教育指導の理論と方法の研究を進め、指導者・教育者・研究者としての専門性を高める。

型にはまる・型を破る

村井潤一郎

企画趣旨に「型にはまった無難な論文の横行」という問題提起がある。とは言え、型にはまらずして、型を破ることはできない。個性的と言われる芸術家も、元を辿れば、オーソドックスなトレーニングを受けていたりするものである。以下、型にはまるための教育法（以下「型はめ法」）、型にはまらないための教育法（以下「型破り法」）を、各々5点ずつ挙げてみる。

型はめ法として最も効果的な実践は、大学院生に研究者の活動を模倣させること、即ち市川伸一先生の言う Researcher-Like Activity である。①投稿論文：できるだけ早い段階で投稿論文を1本通すこと。成功経験が自信、そして心に平安をもたらす。②レビュー：早いうちにレビューをすることで、文献の収集、問題の発見の仕方を体得。③査読：査読者になりきって査読コメントを書くことで、論文を批判的に読むことを学ぶ。④プレゼン：聴衆を前にプレゼンをする機会を設け、ビデオ録画、それを見てプレゼン技術の向上を目指す。⑤教える：TA・非常勤などとして、後輩の面倒をみる。教えることで学ぶ。「自分が役立っている」感覚も重要。

以上、型はめ法だけでは、型にはまった研究者にとどまる可能性がある。型を破るためには、①放牧：大学院生には、放牧が最適。押さえつけずに放牧することで、内なる声が聞こえてくる。②面白がる：面白がることは研究者としての生きる力。大学院生の最大の関心事は就職であるが、まずは面白がることに意義を見出すように育てれば、就職がなくとも研究を継続する強靱な精神が養われる。③大風呂敷：教員は、大風呂敷を戒める教育をしてはいまいか。「学問は知ったかぶりから始まる」と聞いたことがある。④長短：心理学の手法の長短両側面をあわせて伝え、その狭間で悩ませる（不協和がエネルギーになる）。悩みすぎないよう脱出口も用意。⑤自身が研究：大学院生と同じ牧場で型を破る。弟子は師匠の背中を見て育つ。模倣には模範が必要。

以上、大別すると二つの側面が重要となる。型はめ法偏重であれば、「つまらない」論文が横行、型破り法偏重（通常は有り得ないが）であれば、産出された「論文」は戯言になる。基本は型はめ法であるが、型破り法を意識しながらの型はめ法が望ましい。